

●推薦

石堂清倫 奥平康弘 尾崎秀樹 菊地昌典 (五十音順)

●復刻の辞

『社会運動の状況』『特高月報』と共に、戦前日本の内務省警保局
刊行の最大級資料。内地外国人の動向、海外各国共産党及び組織
の情報を月報形式にて網羅。『外事警察概況』と共に復刻刊行！

内務省警保局 編

特秘

外事警察報

全67巻

別冊1

●概要

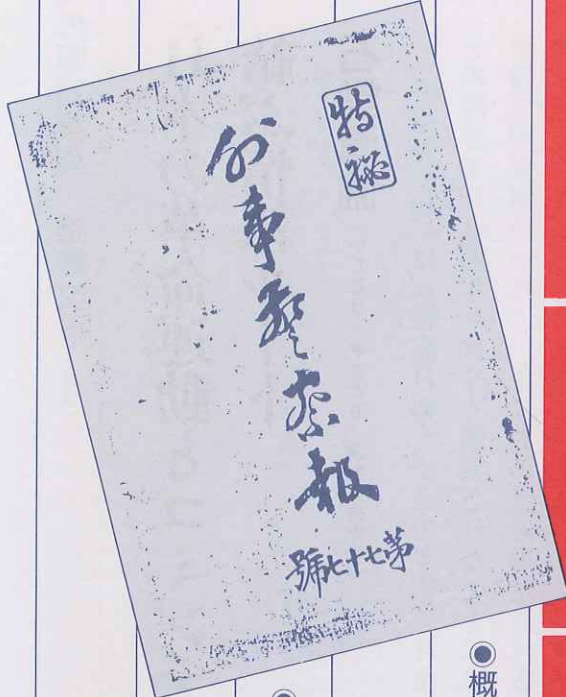
A5判 上製本 函入 各巻平均620頁

●内容

全67巻を11回にて配本(87年5月→89年2月)
大正13年6月→昭和19年7月

●揃価

9990,000円



不二出版

日本の革命運動とコミンテルンを結ぶ情報ルート

石堂清倫 (いしどう・きよとも 運動史研究者)

『外事警察報』は、『特高月報』やその年報『社会運動の状況』と姉妹誌でありながら、あとの両誌よりも何年も早く創刊されたことには大きな意味があったと思われる。『外事警察報』の創刊が一九二一年であることが推定されるが、それはコミンテルンが、日本共産党の組織について、使者を派遣したのと同年にあたるのである。この間の動静は治安当局が最初から察知し、あらゆる情報をあつめたのはいうまでもないが、『外事警察報』がそれらの情報のあるものをどのように整理し発表したかは、研究者として大きな興味もたれるのである。

日本の共産主義運動は、国内の諸条件の成熟の結果として生れたというよりは、それらの条件がまだ萌芽状態にあるとき、過早に、外部コミンテルンの働きかけによって生れた側面がつよいのである。日本共産党創立にしろ、その政治方針、組織方針から運動資金の確保にいたるまで、全面的にコミンテルンに依存していた。したがって、コミンテルンとの接点を破壊することによって、日本の運動を潰滅させられると治安当局が考えるにはある程度根拠があった。事実、一九三一年六月に上海のコミンテルン極東ビューローが破壊されてから、日本の運動が急速に衰微の一途をたどつてもいる。

治安当局が日本の革命運動のコミンテルンとのあいだの情報ルート、連絡方法をどのようにして探求したか、その努力の主流方向がいかなる時点で変化したか。一九四〇年代、とくに太平洋戦争開始にしろ、治安当局の重点変更がどのような形で現われているか。国際連絡のルートにどのような人物が出没したか。その他もろもろの事実を、政府当局の刊行物をつうじて、復元することはかなりの程度に可能であろう。運動の主体的努力によって残された記録がない以上、この復元のための資料として活用する可能性は決して小さくないと思われる。

第24号 (大正13年6月)

- 〔資料〕 共産党内に於ける分派成立事情
- ロシア共産党第十三回会議
- 新経済政策の成績
- 〔内外情報〕
- 〔露国事情〕 極東共産党の現状
- 東洋民族共産会議
- 労働政府の日本研究委員会組織
- ソウェートロシアの財界不況
- 〔独逸事情〕 ゲルマニッシュェ会の発覚
- 〔米事情〕 露国共産党宣伝
- 〔支那事情〕 閉鎖後のメストコム
- 露国帝政復興臨時委員会議
- 陳独秀と全国学生聯合会
- 支那官憲の華工渡日阻止
- 国恥記念日
- 〔国内事情〕 支那国民党東京支部設置準備
- 僑日共済会の現在
- 旅大回収と留日支那人
- 〔彙報〕
- ロシア各種大会の開催／浦塩に於ける共産青年會議
- イルクック共産党宣伝学校拡張／莫斯科共産大学卒業式
- 共産党新入党者心得／露国の外交関係／仏国首相の対露問題に関する陳述／ブルガリア共産党の解散／希臘王朝の廃止／芬蘭反社会党の勝利／独逸総選挙に於ける反動傾向／仏国左党団体の活躍／伊国ファシスト党大勝／支那に於けるK・K・K／時計行商露国人
- 〔人事動静〕 労働露西亜に於ける外交団／駐外ソウェート代表者／英外交渉露国側委員／ロスタ通信員スレバツクの来邦／露国査証官来着／メルラン総督の来朝／タゴールの旅行／黎元洪の帰国／呉光新の来邦／汪兆銘の再渡来／上海政府臨時大統領李承晚渡歐／莫斯科帰来露国人

←右『外事警察報』第87号(昭和4年9月)左『同第126号(昭和8年10月)』

反戦デーと各國に於ける其の状況

八月一日はコミンテルンの指示により、次に掲ぐる如く、各國共産黨に於て「反戦デー」(反戦デー)として、演説會、示威行列、休業等の方法に依り、其の總旨を實現した。此の「反戦デー」は或は「赤色デー」とも稱して居るところもあるが、茲には兩者を其の儘採録した。

第一章 反戦デー決定の経緯

昨夏モスコウに於て開かれたる第六回コミンテルン世界大會は、一九三九年に於て帝國主義戦争反對デーを舉行することを決議したが、其の日は未定の儘であつた。本年三月ベルリンに開催せられた十四箇國共産黨代表者會議で、本年八月一日に其の反戦デーを舉行することに決した。其の後五月十六日コミンテルン西歐事務局長主催のブラッセルに開催せられた十三箇國共産黨代表者會議(別項參照)では伯林事件直後のこと、伯林事件に對するプロレタリアの憤激を發表し「来る八月一日「赤色デー」を開催して、労働者は當日市街を占領して伯林労働者の味方なることを示せ」と機文を發表した。一方此の會議に於て、戦争反對デーの準備を積極的に行ふことを決定し八月一日の戦争反對デーは既定のプログラムであつたが、五月一日の伯林事件で益々熱を煽られた形となり、單に戦争反對デーの意味の外に伯林事件抗議運動の意味も加へらるることになつた模様である。

一

←右『同第137号(昭和8年12月)左『同第164号(昭和11年3月)』(縮小してあります)



彙報

- 片山潜の死亡
- 一、入露後の片山潜の行動概略
- ソ聯紙に發表された片山潜の略歴に依り大正二年(一九一三年)彼が渡米してからの経歴を簡単に示せば次の如くである。
- 一九一三年渡米し、米國で平民新聞を發行、次いで「階級闘争」紙の寄稿家となり、週刊「革命期」誌の編輯者の一人となる。
- 一九一九年米國で日本共産主義者グループを作り、亦米國共産黨の創立に参加し、最初の米國共産黨中央委員の一員に選出された。
- 一九二一年の米英露科に赴き、コミンテルン第三回大會でコミンテルン執行委員幹部會員に選出され、爾來繼續して幹部會員であつた。又ワシントン會議と並行して開催された一九二二年末の機動労働者會議の發起者且つ組織者であつた。
- 二、世界プロレタリア革命の爲の絶對的闘士の追憶
- 共産主義の偉大なる闘士クララ・ツェトキンに於いて、今一人の世界プロレタリア革命の古い克己的な闘士、骨髄迄のボリシェヴィキ、其の偉い生涯を世界の労働者、技術者に當つて。
- 一四五

外國事情 中華民國

り、其の總兵力は次の紅軍編成表に示せる如く約五十萬人に及ぶ言はれてゐる。この紅軍の基礎たる中國共産黨に對し、曾て一九三〇年鄂陽獨裁政治家スターリンが「紅軍の總兵力を五十萬に擴大すべく期せよ」と激勵したることを思へば、今彼は快心の微笑を漏してゐるであらう。

紅軍編成表

方面別	總司令	政治主任	軍別	軍長	兵力
第一方面軍	朱 德	毛澤東	第一師	陳伯鈞	小銃二〇〇〇〇、機關銃五三〇、
			第二師	劉伯鈞	運發拳銃六〇〇〇、モルセル銃八〇〇〇、ストライク白砲一六、
			第三師	周志澆	〇、ストライク白砲一六、
			第四師	蕭 彪	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第五師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第六師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第七師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第八師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第九師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十一師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十二師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十三師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十四師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十五師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十六師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十七師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十八師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第十九師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十一師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十二師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十三師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十四師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十五師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十六師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十七師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十八師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第二十九師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十一師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十二師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十三師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十四師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十五師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十六師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十七師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十八師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第三十九師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十一師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十二師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十三師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十四師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十五師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十六師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十七師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十八師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第四十九師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、
			第五十師	蕭 乾	小銃一五〇〇〇、機關銃一五〇、



外國事情 中華民國

最近に於ける中國紅軍の動靜

一九三五年末より三六年初に於ける中國紅軍の動靜を見るに現在(二月五日)迄のところ西北紅軍即ち四川の朱德、徐向前、張國燾の毛澤東、劉子丹、及徐海東等の諸軍の動靜に其の發見する變化は然が、只湖南、湖北、四川省境の賀龍、蕭克等は相當活動し、三五年末以來活潑運動を遂げ、最近既に貴州に進入して同省省城貴陽附近に迫つて居る爲、同地方の匪徒或は連年の暴行を呈して居る。其の状況は左の如くである。

戦前「国際国家」日本の実態を知る

奥平康弘（おくだいら・やすひろ 東京大学教授）

いまの日本では、「国際化」「国際国家」のたぐいのことばが、やたらに流行している。戦前の日本はどうだったのだろうか。

むかしは、外国の「悪」影響を受けることなしに日本の「独自性」を保持してゆくことにきゅうきゅうとしていた。したがって外国人に対する査察体制は明治初期、早々と出来あがっていた。外事警察がこれである。政治警察の観点から外国人の動向を視察し、これを特別に取扱うというのだから、外事警察は「高等警察」に属していた。一九一七年のソ連大革命があつてからは、共産主義、社会主義の取締りの必要上、外事警察が一層重要になる。こうして一九二〇年内務省警保局に外事課がおかれることになり、外事警察が本格的に展開することになる。「外事警察報」が刊行されるのは、まさにこの時期である。外事警察は一時期、特別高等警察とコミになつて警保局保安課に属するが、一九三七年日中戦争の開始とともに、保安課からもう一度外事課が独立することになる。つまり外事警察は特高警察的な色彩を加えて、外国人の情報収集活動を軍機保護法・国防保安法に違反するスパイ行為として摘発する仕事を典型とする、戦時取締りの性格をも帯びるようになるのである。

外事警察は、このように国内居住の外国人を厳格な視察体制下におくことを使命とするだけでなく、諸外国における共産主義運動の情報収集をも任務とした。ソ連の革命の影響が日本に波及することをおそれ、一九二一年、警保局はウラジオストク、ハルビン、上海などの要地に駐在事務官を派遣したのが皮切りで、のち世界のいろんなところに駐在事務官が派遣され、それぞれの社会情報を探知収集せしめた。要するに、CIA・KGBもどきのスパイ活動に当たらせていたのである。実際、駐在内務事務官がスパイ容疑で、派遣先の政府から逮捕された例もあるくらいである。「外事警察報」には、こうした駐在事務官の報告にもとづく外国事情が、国内事情や外国人人事の動向などとともに収集されている。「外事警察報」は、「国際国家」を標榜するいまの日本が、どんな前史をもっているかを知るためには不可欠な資料だと思う。

昭和前期・運動史研究の第一級資料

尾崎秀樹（おさき・ほつき 作家・評論家）

内務省警保局のまとめた『外事警察報』は、年度毎に編集された『外事警察概況』（既復刻）とともに、日本の社会運動への取締り当局の対応を知るうえで、欠かすことのできない貴重な資料である。日本の共産主義運動とコミンテルンの関係、各国における思想的・政治的グループの紹介、研究資料、内外人の動き、海外での日本人反戦活動の報告など詳細をきわめており、それらを通して戦前の運動の困難な歩みを逆照射することができる。

日本共産党の運動は、コミンテルンの指導を強く受け、コミンテルン日本支部として成立しただけに、警察当局はその人的・物的交渉にきわめて敏感であり、内外の調査も多岐にわたつてととのえられていた。コミンテルンが第七回大会で人民戦線方式を打ち出してからは、さらに警保局の海外情報の収集活動は活発となり、いわゆる左翼文献の流入ルートも、それまでのウラジオストクや上海経由から、太平洋を渡ってくるようになり、警戒はさらに厳重をきわめる。

私は当時の反戦運動の実態——とくにゾルゲ事件のあり方を調べるうえで、この『外事警察報』や『外事警察概況』から多くのものを得てきた。そして強く感じるのは、尾崎秀実たちの行動をひとつの類型にはめこもうとする当局のやり方だ。しかしそれにしても一級資料であることは否定できない。

ここにふくまれる諸資料を用いて昭和前期の思想的・政治的諸運動を改めて確かめてゆくことが可能である。

●関連図書（案内）

内務省警保局 編（昭和3→19年）

厳秘 出版警察報 全40巻 475,000円
十別冊十補巻一

秘 出版警察資料 全15巻 147,000円
十別冊一

昭和10～15年間、「出版警察報」の姉妹誌として刊行。全47号の全号を収録。

内務省警保局 編（昭和5→10年）

秘 出版警察概観 全3巻 72,000円

秘 出版警察関係資料集成 全8巻 120,000円

大正期の出版警察の総計を含む。又「出版警察例規集」等の取締の実態を明す。

（パンフレットご希望の方は小社まで二報下さい。）

『外事警察報』目次抄録②

〔雑報〕
米領事的身元引受拒否／ロシア日刊新聞／ソウェート
ロシアと各国との科学的著作交換／レングラーの人口
／国際聯盟議事予定／露西亜通過雑誌／支那人犯罪事
件調／外事警察講習会開催
〔附録〕
在留外人一覽表

第78号（昭和3年12月）

村落少年「ピオネル」の事業 スモーリチ
〔外国事情〕
〔支那〕支那に於ける最近の排日運動
中国共産党第六回大会
〔露西亜〕コミンテルン第六回大会の状況
〔仏蘭西〕仏国の統一労働総同盟全国委員會議
〔彙報〕
国民政府の訓政宣言／ソウェートロシア第三インターナ
ショナル共産党本部より発送したる世界各国共産党機構、
系統、現状に関する報告／欧州共産主義の衰頹／支那革
命援助策と共産党の両意見その他／露国に於ける糧食の
不足／サッコー及びヴァンゼツチ事件に関する新宣誓書
／米国内務省共産党の悪辣手段を發く
〔人事動靜〕

知名支那人の來往／吳光新の渡來／國際労働事務局長ア
ルベル・トーマの來邦／白虎隊紀念碑除幕式の執行／
駐日独逸大使の帰國／伯刺西爾大使の退邦

〔雑報〕
露国科学協會英國の態度を列國に訴ふ／プロフィンテル
ンの反日的檄文／コンミュニストインターナショナル
共産党の活動を促さんとす／沿海州方面の窮狀／ソウ
エート聯邦の經濟狀態／羅馬尼亞に於ける印刷物検閲制度
の廢止、戒嚴令の解除／スターリンの経歴／米露露國高
官二名の入國を拒絶す／对在米黒人の共産主義宣傳プロ
グラム／在歐白系露人の所有機關紙／在北平漢字新聞社
並に通信社調査表

第112号（昭和6年11月）

共産主義青年インターナショナルの近況（其四）

コミンテルン大会史（其二）

〔外国事情〕

〔中華民国〕

滿洲事變と中国共産党の活動

上海に於ける排日運動

支那赤軍の状況

中国の水災に関する中国共産党の指令

国内戦争と中国に於けるソウェート運動

〔比律賓〕比律賓共産党第一回大会

〔露西亜〕滿洲事變とソ聯邦の態度

〔独逸〕独逸赤色国民投票運動の状況

〔仏蘭西〕仏蘭西共産党の反軍国主義運動

〔チエッコ・スロワキヤ〕失業反対闘争國際會議

〔英吉利〕英國共産党と政局

〔彙報〕

赤色スポーツ・インターナショナルの執行委員會第六回

總會／ソ聯邦視察消費組合代表團の歸英／中日両共産党

の日本軍東三省侵略に対する宣言／中国共産党中央機關

紙の再現／浦塩市第三回共産党會議

〔人事動靜〕

暹羅國皇帝皇后兩陛下の御來朝／運輸従業員國際聯合代

表エド・フィンメンの來邦／ソウェート大使館員の歸國

ソウェート通商代表部員の轉勤／ソウェート通商代表部

員の視察旅行／馬伯援の歸國

〔雜報〕

中国警察官の暴徒射殺／滿洲事變と哈爾濱露字新聞の頻

出／國際労働者救援會の中国水災救援計画並に大会に対

する中国代表の派遣德恩／支那文字のラテン化運動／伯

林警察と共産党／土耳其古國大使館の移転／ペルー國公使

館の移転

〔埋草〕

日本の対ソ連認識の錯誤をみる

菊地昌典 (きくち・まさのり) 東京大学教授

ロシア革命の成功と、ソ連邦の誕生は、日本の天皇制国家権力に深刻なショックを与えた。以来、日本は、「謎の国」「恐怖の国家」として日本国民の眼と口をふさぎつづけ、一方で、軍・官・民の諸機関を総動員して、ソ連「共産主義」の実態把握に努めた。

『外事警察報』は、レーニン政権打倒、シベリヤ侵略企図の挫折後、「共産主義」がアジアへ浸透する経緯を実証する好個の資料である。ソ連共産党とコミンテルン、それに連動した中国共産党の動き、とりわけハルビン、奉天、ウラジオストック、天津らの中国人、朝鮮人たちの動向が追跡され、一方、国内では大正一四年の日ソ国交回復と相前後して治安維持法を制定し、「共産主義」の撲滅に狂奔していった。当時の日本国民にはこのことは全く判らなかつた。日ソ国交回復後のソ連の内情を、あらゆる触手をつうじて探索した実態が、『外事警察報』によって一目瞭然となるのである。

とりわけ興味深いのは、ロシア革命後、国外へ亡命した反革命グループへの関心の異常な深さであり、また、ロシア共産党の内部闘争、粛正の進行を克明においつづける姿勢である。

にもかかわらず、日本権力者たちのソ連認識は、その国力の評価、ソ連ナショナリズムの強固さ、その国際影響力の大きさ等について、根本的な錯誤を犯すことを避けることができなかつた。ノモンハン事件の日本軍敗北は、その一例である。

『外事警察報』は、日本の内務省が、いかにソ連の力量を誤断したか、の恰好の資料として存在している。換言すれば、日本のソ連認識の歴史に反省を迫る有力な一材料といつてもよい。戦前の日本のソ連調査は、第一級ともいわれるが、では、なぜソ連を誤断したかがいまこそ問われなければならない。

現在もなお、日本がソ連を仮想敵国視し、日本人の七五%が、ソ連を嫌いな国と考えている状況下で、この『外事警察報』が復刻されることは、過去の我々が辿ってきた歴史に反省を迫ることになる。

『外事警察報』目次抄録③

世界の失業者数

第216号 (昭和15年7月)

〈巻頭〉

石油利権を繞る最近の米墨関係

〈外交〉

ソ聯・ラトウイヤ関係並にソ聯・エストニア関係

ソ聯・リスアニア両国間紛争の解決

〈政治〉

愛蘭の地位

〈各国国内事情〉

ソ聯の八時間労働制並に一週七日制の実施／ソ聯に於ける国民教育／米國に於ける政府転覆陰謀未遂事件／青年光復社／重慶政府の軍資金募集新方策

〈軍事〉

独仏休戦協定／仏伊休戦協定／独・伊・英の空軍／印度に於ける英軍

〈経済〉

ナチス独逸の戦時経済対策

〈コミンテルン〉

独逸軍のバリ進撃直前に於ける仏國共産党の宣言

〈諜報謀略〉

米國に於ける第五列の警戒

〈参考資料〉

ナチス親衛隊(S・S)の歴史、任務、組織／伊太利に於けるユダヤ人の勢力／上海に於けるユダヤ人の現状／社会主義より共産主義への移行／共産主義とは何か／蒋介石の磁鉄戦を痛斥す／和平運動の第二階段

〈六号記事〉

支那新政府成立と福建省政府の策動／支那の民間航空

『外事警察報』の欠号について

左記の号数は、今日原資料を未発見です。所蔵等ご存知の方は、小社までご一報下さい。
1、23、38、53、56、195、202、212、215の各号及び256号以降分。

『外事警察報』の姉妹誌

外事警察概況

内務省警保局編 全8巻 (昭和10年↓17年)

体裁—A5判 上製 函入 総4、220頁

解題—石堂清倫 (運動史研究家)

定価—全8巻揃価95、000円

●内容

第1巻	昭和10年中に於ける外事警察概況	427頁
第2巻	〃	623
第3巻	〃	608
第4巻	〃	403
第5巻	〃	407
第6巻	〃	378
第7巻	〃	516
第8巻	〃	858

『尾崎・ゾルゲ事件』の詳細な情報 (第8巻所収) の

他、在外日本人の反戦活動・各国共産党

との関連を収載。外事警察の極秘資料。

←左→『外事警察概況』第8巻 右→同第1巻より (共に縮小してあります)

第十六巻表 附録

中華民国人並滿洲國人留學生學校別調査表 昭和十四年四月末日現在

出身省別	私立		官費		合計
	人数	名	人数	名	
河	〃	〃	〃	〃	〃
山	〃	〃	〃	〃	〃
江	〃	〃	〃	〃	〃
浙	〃	〃	〃	〃	〃
安	〃	〃	〃	〃	〃
湖	〃	〃	〃	〃	〃
西	〃	〃	〃	〃	〃
北	〃	〃	〃	〃	〃
東	〃	〃	〃	〃	〃
南	〃	〃	〃	〃	〃
西	〃	〃	〃	〃	〃
江	〃	〃	〃	〃	〃
蘇	〃	〃	〃	〃	〃
廣	〃	〃	〃	〃	〃
西	〃	〃	〃	〃	〃
雲	〃	〃	〃	〃	〃
貴	〃	〃	〃	〃	〃
雲	〃	〃	〃	〃	〃
察	〃	〃	〃	〃	〃
熱	〃	〃	〃	〃	〃
河	〃	〃	〃	〃	〃
北	〃	〃	〃	〃	〃
平	〃	〃	〃	〃	〃
天	〃	〃	〃	〃	〃
津	〃	〃	〃	〃	〃
東	〃	〃	〃	〃	〃
西	〃	〃	〃	〃	〃
南	〃	〃	〃	〃	〃
直	〃	〃	〃	〃	〃
隴	〃	〃	〃	〃	〃
南	〃	〃	〃	〃	〃
寧	〃	〃	〃	〃	〃
西	〃	〃	〃	〃	〃
甘	〃	〃	〃	〃	〃
肅	〃	〃	〃	〃	〃
青	〃	〃	〃	〃	〃
海	〃	〃	〃	〃	〃
北	〃	〃	〃	〃	〃
平	〃	〃	〃	〃	〃
津	〃	〃	〃	〃	〃
滬	〃	〃	〃	〃	〃
寧	〃	〃	〃	〃	〃
京	〃	〃	〃	〃	〃
滬	〃	〃	〃	〃	〃
計	〃	〃	〃	〃	〃
合	〃	〃	〃	〃	〃
計	〃	〃	〃	〃	〃

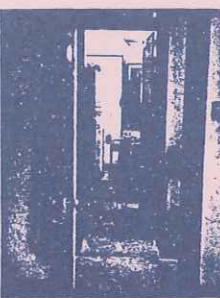
(一)の(共)異寫考案件事圖報詳際隔るせと心中をゲルソ



1. 百戦百勝人 リヒャルトゾルゲ



2. 無線技術者 獨逸人 リヒャルトゾルゲ



3. 官舎 技術者リヒャルトゾルゲ

4. カラウゼンの衣袋部 屋に隠匿せる無線電

外事警言察報

全67巻・別冊1

●復刻版概要

体裁——A5判 上製本 各巻平均6220頁 総約41、500頁

内容——大正13年6月、第24号 ↓ 昭和19年7月、第255号

別冊——「総目次・索引」(これのみ分売可/定価≒5,000円)

揃価——990,000円

●配本予定

第1回配本	第1	6巻	大正13年6月	15年3月(24→45号)	既	刊
第2回配本	第7	12巻	大正15年4月	昭和3年4月(46→70号)	"	"
第3回配本	第13	18巻	昭和3年5月	4年8月(71→86号)	"	"
第4回配本	第19	24巻	昭和4年9月	5年12月(87→101号)	"	"
第5回配本	第25	30巻	昭和6年1月	7年6月(102→119号)	'88年	2月
第6回配本	第31	36巻	昭和7年7月	8年12月(120→137号)	"	4月
第7回配本	第37	42巻	昭和9年1月	10年6月(138→155号)	"	6月
第8回配本	第43	48巻	昭和10年7月	12年4月(156→177号)	"	8月
第9回配本	第49	54巻	昭和12年5月	14年3月(178→200号)	"	10月
第10回配本	第55	60巻	昭和14年4月	16年4月(201→225号)	"	12月
第11回配本	第61	67巻	昭和16年5月	19年7月(226→255号)	'89年	2月

各回配本90,000円

(取扱店)

不出版

東京都文京区向丘一―二―三
 電話〇三―八―二―四四三三―二―三
 FAX〇三―八―二―四四六四
 振替(東京)六一九四〇八四